

て今年度内に日本文化科学社から上記4名の共著として上梓される運びになっている。これらが精神薄弱児・者の新しい判別の具としても、また彼らの指導に直接援

助の手をさしのべるものとしても有効なものとなることを心より願うものである。(11月30日)

研究経過報告

久 世 敏 雄

1. 社会化に関する研究

子どもが社会化されていく過程、例えば、子どもの社会的行動が、いかに獲得され学習されていくか、さらにそれらの諸行動が獲得されていく過程に動くであろう諸機制を検討することは容易なことではない。この問題に関しては、従来の文献総覧を含め、今後の課題であるが、現時点までに、着手した研究はつぎのとおりである。

(1) 幼児期の社会化に関する縦断的研究

社会化に関して、共通に関心をもつ4、5名の方の参加を得て、研究チームを構成し、これから活発な研究を展開すべく、目下、問題意識・方法の意見調整・検討中である。なお、研究の焦点は、社会化過程の方法論に集中したい意向である。

(2) 児童の社会化過程に関する縦断的研究

この研究は、(1)小学校6年間において、比較的変動する社会的行動—達成行動、自立的行動、道徳的判断および性役割行動—と変動しない社会的行動の区別、(2)小学校6年間における母親の子どもに対する愛情・統制の変動、(3)両者の関連の検討を目的としている。これは、名古屋市青少年問題協議会、名古屋市教育委員会による児童の心身発達の追跡研究の一貫として行なわれており、丸井教授とともに、その資料の収集、分析に努力している。

これらは、縦断的検討を意図する点で特徴をもつのであるが、何れも、フィールド・スタディであり、社会化過程に動く諸機制を検討するためには、実験的研究が望まれる。この点に関しては、他日を期するものである。

なお、社会化に関する検討は、当然のことながら、親の子どもに対する期待・願望を明らかにすることが必要である。この点に関して、統教授を中心とする過疎研究グループの収集した研究資料をもとに、「過疎地の親の子どもに期待する職業・結婚観」を検討する予定である。

2. 青年期に関する研究

ここでは、青年心理学の課題の検討が残されているが、最近、青年心理研究の展開過程に関心を抱いている。この過程は、初期の段階では、実態調査的研究が多

く、しだいに、仮説検討的方向で研究が進められていると思われ、児童心理研究のそれと一致することになる。この青年心理方法論の展開過程の実証的検討は、青年心理学の諸問題として位置づけることができよう。

つぎに、青年期の自我にかかわる問題として、われわれは、困った場面における自己開放性 (self-disclosure) の検討を行なっている。この自己開放性は、青年の直面する課題 (領域) や対人別 (父、母、兄弟姉妹、親友および先生) にみて、どのような差異があるかについて、中学生および大学生を中心に検討した。さらに、困った場面における自己開放性にかかわる要因として、愛情ならびに信頼感について検討しており、過日、教育心理学会第14回総会で報告した。現在までの成果は、「両親の愛情の認知と困った場面における自己開放性についての一研究」および「困った場面における親の信頼感についての一研究」(資料)として、本巻に投稿した。この問題に関しては、勤労青年に関する資料が不足しており、他日補足したい意向である。

なお、昨年来、青年の「人生観の形成」がどのようななされているかについて、日本の研究資料をもとに検討する機会が与えられた。これは、依田新編「青年心理学」に収められている。また、最近、現代青年心理学講座全7巻が依田新ほか編集として企画、刊行され始めたが、そこで、「青年と世代の断絶」について考察する機会が与えられた。近年、とみに、青年と世代の問題が注目されており、この方面の文献を収集することができた。

3. 上記以外のいわゆる共同研究として、つぎの諸研究に参加している。

(1) 依田教授を中心とする総合研究「現代青年の実態と人格形成」の分担課題「青年の家庭における適応」の問題を、東海地区青年心理研究会 (大西教授会長) で調査実施している。

(2) 統教授を中心とするいわゆる「過疎研究グループ」この研究グループは、9月25日に統教授が急逝され、その支柱を失ったが、日本教育心理学会第14回総会で、「いわゆる過疎地域の家族関係」「いわゆる過疎地域の問題」として、各人それぞれの分担発表を行なった。な

お、このグループは、現在までに収集して研究資料を中心
に、検討を進めることで意見の一致をみている。

(1972. 11. 30)

注1 大学進学 of 現代的意図 就職指導 日本リクル
ートセンター, 1972. 4

注2 困った場面における自己開放性についての一研
究 (蔭山氏と共同) 青年心理学年報 (仮称) 金子書
房 1972

注3 依田新編 青年心理学 光生館 6172. 11

注4 依田新ほか編 現代青年の社会参加 金子書房
1972. 11

一年間の研究経過報告と今後の課題 植 村 勝 彦

1. 一昨年来の共同研究である「過疎地域」問題は今年度も継続して行なわれ、次の如き成果と研究を続行中である。

イ 昭和46年度科学研究費総合研究(A)〔研究代表者続有恒教授〕による調査に関して、熊本県水上村、長野県上村(2度目)の面接調査結果は、これまでのものと同様、夫々テープを翻文し、「名古屋大学教育学部教育心理学科研究資料」No.5及びNo.6として公刊した。また、過疎地域からの離村者に対する面接調査については、われわれ名古屋地区グループの受持ちである長野県上村、岐阜県坂内村からの愛知県下への転出者について、夫々40名のケースの面接を完了したが、データ収集が多少遅れている他地区グループもあり、目下のところ、集まったデータの整理を進めている状況で、分析の段階には至っていない。しかし、近日中に全地区のデータが揃う手筈になっており、分析作業に入る予定である。

ロ 長野県上村(1)、山形県大蔵村、島根県頓原町の「研究資料」のデータを基にした分析結果は「いわゆる過疎地域の問題(5)」として、地域共同体意識の変容のありさまを、公的共同活動の場合を例にとって、1972年度日本教育心理学会総会において発表した。また、その他の地域の資料集のデータを加えての、より綿密な分析は本紀要に報告されている。この研究に関する、今後の差当たりの課題は、農事共同、近所付合など、私的共同活動における意識の変容の過程、また、その背景要因の構造を明らかにすることにある。

ハ 「研究資料」を用いての、いわば「質」的データの分析と平行して、上記の視点と同種の分析を質問紙調査によって「量」的に把握する試みに着手した。そして、その一端を1972年度日本社会心理学会大会において「地域社会の変貌にともなう生活意識の変容—愛知県下の一過疎町村を例として—」と題して報告した。未だ十分練れたものとなりえていないが、「質」と「量」との

相互補完による、過疎地域社会の住民意識の変化についての理解を促進させる手掛りとして意図したものである。

ニ 過疎研究グループの今ひとつの問題意識としての方法論的討究—自由な面接を通して得られた情報から、どれ程の真実を導き出し得るか—は、理論的支柱としての続教授を喪った現在、以前に倍して困難な事態となったが、教授がわれわれに残していかれた課題として、時間をかけても自分なりの方法を考究していきたいと考えている。

2. 過疎地域に限らず、地域社会集団の心理学的研究を志向してみたいことを昨年の本欄に述べたが、そのアプローチの第一歩を地域共同体意識の変容に求めたことは、community psychology がややもすると community Mental Health の研究に限定されてしまいがちな傾向への批判を込めたものである。目下、過疎地域を含めて、地域社会構造の形態を異にする地域(過密、過疎、団地など)における共同体意識の変容の認知を、その共通性(時代要因)と特殊性(地域構造要因)に焦点をおいて明らかにすることを試み、その一部は県下の町村を対象に、小規模ながら調査を実施中である。この問題は、更に、地域社会住民の現実の連帯度(Community Solidarity)の測定の問題へと波及していくが、これらを含めた本格的な取組みは来年度以降の計画として予定している。

最後に、私にとって、名古屋大学における研究および教育上の指導者であり、また、過疎研究グループの名実ともリーダーであり、理論的支柱であられた、故続有恒教授のご生前のご指導に改めて深く感謝の意を表するとともに、衷心よりご冥福をお祈り申し上げるものである。

(1972年11月30日)